

歴史的音源で検証する 20 世紀ピアノ 黄金期の音色

2022 年度活動報告

「ピアノ黄金期の 2 大ピアノ産地「ドイツ」「フランス」の音色聴き比べ」

2022 年 10 月 26 日

講師：梅岡俊彦、松原聡

会場：大学会館ホール

現在コンサートや CD 録音で聴く事が出来るピアノはスタインウェイやヤマハなど数社のメーカーの独占状態と言えるが、20 世紀初頭は世界中の多くのピアノメーカーが質の高い楽器で競い合っており、聴衆も個性の違う音色を日常的に聴き比べてピアノ音楽の多様性を存分に楽しんでいた時代であった。またピアニストも、自分の好みの音色の楽器を選ぶ事によって演奏の独自性をアピールする事が出来た。今から約百年前の「ピアノ黄金期」と言うべきこの時代、世界中のピアノ産地の国の中で 2 大勢力として圧倒的な人気を得ていたのがドイツとフランスであった。今回はこの 2 つの国のピアノの魅力を 20 世紀初頭当時の SP レコードとアコースティック蓄音器での演奏で検証してみる事にした。ピアノ黄金期の音色の違いを検証するため、今回も約 1 世紀前に発売された SP レコードと 1930 年製の英国製大型蓄音器を使って様々なピアノメーカーの歴史的音源を再生してみたが、復刻 CD では味わえない生々しい音で両国のピアノの音色を聴き比べる事が出来た。今回は比較のため、演奏はピアノ作品の代表といえるショパンを中心にフランス作品に限定し、ドイツとフランスのピアノ録音を交互に再生してその個性の違いを確かめる事にした。

比較したピアノメーカーと演奏家を紹介する。

ドイツ

ハンプルク・スタインウェイ

演奏：ラウル・フォン・コチャルスキ／曲名：ショパン《華麗なる円舞曲》

ペヒシュタイン

演奏：エミール・フォン・ザウアー／曲名：ショパン《ワルツ変イ長調》

ブリュートナー

演奏：モーリッツ・ローゼンタール／曲名：ショパン《ワルツ ホ短調》

グロトリアン＝シュタインヴェーク

演奏：ワルター・ギーゼキング／曲名：ドビュッシー《アラベスク第 1 番》

フランス

エラール

演奏：フランシス・プランテ／曲名：ショパン《エチュード嬰ハ短調》

演奏：アンリ・ジル＝マルシェックス／曲名：ラモー《メヌエット第 10 番》

ブレイエル

演奏：ロベール・カサドシュ／曲名：ショパン《バラード 第1番》

事前には「力強く明瞭な音色」が特徴のドイツ製、「華やかで肉感的な音色」のフランス製という先入観があったものの、実際の演奏を聴くと両者共それぞれの個性は存分に発揮しながらどのメーカーも見劣りする点は殆ど無く、総合力では互角に渡り合っていた様である。残念ながらフランスのメーカーは2つの世界大戦のダメージで経営が行き詰まり20世紀半ばには姿を消してしまい、ドイツのメーカーも戦災の影響が少なかったスタインウェイのみが健在だったものの、他のメーカーは復興するのにかなりの時間を要した様で、20世紀後半の世界のピアノメーカーの勢力図は大きく様変わりしてしまったと言える。

本イベントの後半は、今や殆ど聴く事が出来ないフランス製ピアノが一時期日本でも活躍していた事例を紹介させて頂いた。最初に、戦前日本で発売されていた音楽月刊誌に掲載されたピアノ販売広告を何点も見て頂いたが、早くからドイツとフランスのピアノを積極的に輸入していた様子が伺い知れた。

次に、日本に輸入された代表的なフランスピアノとして赤坂迎賓館にある1906年製の豪華なエラールを取り上げた。今でも迎賓館での公演で使用されている豪華な装飾のピアノが、1949年に世界的なピアニスト原智恵子によって日比谷公会堂で弾かれたということと、最近発見された珍しい舞台写真で確認する事が出来た。また神戸オリエンタルホテルにあった1927年製、新潟三条東高校にあった1930年製のエラールの由来や現状も紹介する事が出来た。

また大正時代に、母国の近代ピアノ作品を初めて日本で披露したフランスのピアニスト、アンリ・ジル＝マルシェックスが、まだ珍しかったフランスのピアノを積極的に演奏した事実も貴重な写真と共に披露できた。最後に、関西に現存するドイツやフランスの歴史的ピアノの存在を何件か公開する事も出来た。

今回はピアノ黄金期のドイツとフランスのピアノの魅力の紹介と共に、日本でのフランスピアノの活躍振りを検証する事が出来た。多くのピアノメーカーが競合していた黄金期の王者であったドイツとフランスのピアノの音色を歴史的音源で知る事で、ピアノ演奏における様々な可能性を若い世代のピアニストに再考してもらえれば幸いである。

梅岡俊彦